
落ち葉の道、並んで歩くと

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ち葉の道、並んで歩くと

【Nコード】

N2149Y

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

塾講師のまこと。声をなくした小1のリク。ある日まことの幼なじみ紗奈が転がり込んできて…。落ち葉の季節に書きたかったお話です。

<1日目>

日曜はゴロゴロまったり過ごすのが我が家ルール。

一家の主、誠がそう宣言するのは、何も今に始まったことではない。

ご飯とお風呂は用意するけど、あとは何もしない。よって、一日ゆったりと過ごす。

とは言え、我が家に住むのは誠と小1のリクのふたりきり。

春先まではリクの母も住んでいたが、出ていってそれきりだった。

ピンポーンの音に、休日モードの誠はだらだらした足取りで玄関へ行く。

郵便かな、ってつぶやいて、とりあえず片手に印鑑を握る。

平屋の古い家屋は死んだ祖母が使っていたまま。昭和の香りのただよう我が家はインターホンが付いていない。古式ゆかしく玄関先での応対である。

「はいはい。……って、紗奈さなかよ」

誠があける前に、引き戸の玄関が勝手に開いた。

夕陽を背負って「ひさしぶり」と遠慮なく上がってくる相手は幼なじみだった。

ヨチヨチ歩きの公園デビュー以来、小中高と並んで登下校した筋金入りのご近所さん。

大学進学を機に実家から小一時間ほど離れた祖母宅に下宿した誠と、数年前にこちらに出てきて就職した紗奈。

最初の頃は懐かしがってちょこちょこ遊びに来ていた彼女も、仕事の忙しさや、誠に彼女が出来たりで遠慮したのか、今年に入ってから疎遠だった。

そんな彼女がよっこいしょ、と肩から落としたボストンバッグに、誠の中の古い記憶が蘇る。

これはあれだ。

「家出してきたから今日泊まってくね」と、親子喧嘩のたびに人んちをアテにしていたお決まりパターン。もちろん連絡なんて一切なし。相手の都合を気にしないのが紗奈流で。

なんて思い出してる間に、ハイこれお土産ね、ってポン、とビニール袋を持たされる。

中には紗奈が小さな頃から目がないイチゴポッキー。

当たり前のように靴を脱いで廊下を歩きだすその腕を慌てて引っぱり、

「ちょっと待て。お前今度は誰と喧嘩してきた?!」

今は一人暮らしで喧嘩相手はいないはず。

「違っつてば。寮の水道管破裂しちゃってさ。仕事から帰ったばっかなのにいろんなところ水浸しになってしばらく住めないって追い出されるし、建物が古すぎるからって修理に時間かかるって言われるしでこつちも迷惑なのよ。悪いけど、しばらく泊めて?」

「いやいやいや。うち泊めれる場所ねーし」

「使ってない部屋あったでしょ。掃除はちゃんとするからさ」

「今は物置だ」

「うそ! 隣のもみじが見える丸い窓のあの部屋も?!」

気に入ってたのに、と叫ぶ彼女に、なんでうちの間取りを知っている。と、誠は肩を落とす。

早口でおしゃべりで強引。そんな幼なじみに言葉で勝てたためしがない。

突破され、諦めてボストンバッグを持ち上げた時。

「ちよつとまこちゃん! この子ダレ? さては隠し子だな?」

「——あッ！」

彼女の知らない同居人について伝え忘れていた。
慌てて後ろを追えば、さっきまでＴＶを見ていたリビングで、闖入者にキョトン、とした顔のリックがいた。

その背中越しに誠を見つけ、安心したように飛びついてくる。

「大丈夫だぞ。こいつ声はデカイけど、怒ってないから」

まわりつくり子どもをそのままに、リビングに紗奈を押し込む。

「なにバカなこと教えてんのよッ」

「その通りだろ。近所迷惑だから声落とせ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まこちゃんのかせに正論を・・・・・・・・」

「当たり前前の注意だ。オレこそ大人に言いたくない。」

——大きい音に敏感なんだ。静かにしてやってくれ」

最後の言葉だけ、リックに聞こえないようひそめて言う。

何かを感じ取ったのか、彼女は静かになった。

「リック。元カノの子だね。預かってるんだ」

くしゃくしゃと、頭をなでてやると嬉しそうに笑う。

いかにも懐いてます、な様子に、紗奈は呆れた顔をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あいかわらずお人よしね」

そのお人よしをアテにして来るヤツに言われたくない。文句は心の中で盛大に。

結局、奥の部屋をキープした紗奈は、他の荷物も取りに行くからよろしくね。っと、車を運転させ、2回往復させられた。

ついでに立ち寄った商店街で材料を買い、今日は奮発して焼き焼きである。

一人暮らしじゃ中々食べれなくて、と喜ぶ紗奈。おいしそうにほおばるリック。

ふたりの姿に、まあいっか、となんとなく納得してしまう誠がい

る。

基本的に彼は他人の喜ぶ顔を見れば満足するタイプだ。
学生時代に始めた塾の講師のバイトが、今の誠の勤務先。そのま
ま就職した彼にとつて居心地はいいが、生活は昼夜逆転に近い。
同じくリクにもそれは当てはまる。特に平日は家に帰っても寝る
まで一人きり。

まだ小1なのに不憫だ。と嘆けば、紗奈にはいつまで手元で育て
るつもりよ。と一蹴された。

その紗奈とは見れば、感情は豊かだが一言も声を出さないリクを
気にしている様子。

「今は声が出てこないんだ。前はよくおしゃべりしてくれたんだけ
どね」

「ふむ……」

紗奈が無口になると、TVの音がやけに気に障る。

いつも点けているのに、と思うとそれがおかしい。

くいくいと袖を引かれ、うん？とリクを見る。

空っぽのとり皿に、誠の頬がゆるむ。

「次はなにがほしい？ 肉に、そうだ、野菜もちゃんと食べるよ」
子煩悩を絵にかいた様な幼なじみの姿に、紗奈が珍妙な視線を向
けていた。

<2日目>

平日、誠の朝は早い。

小学校の登校時間にあわせてリクを起こし、朝ごはんを食べさせ、
時間割に合わせて持ち物チェックをしてから学校に送り出す。

続いて掃除に洗濯、食器の片付け等々……。

合間に夕ごはんのメニューを考え、必要な食材を書き出して買い物へ。

堂に入った主夫ぶりでごまごまと家事を進める誠を、

「マメだよねえ……」

ふたりでリクを見送ってから、リビングでのんびり陣取る紗奈。8時半を回っても一向に出かける気配がない。

「お前仕事は？」

「今日は夜勤よ。お昼食べたらず準備しないと」

病棟勤務の看護師である紗奈は、変則勤務だった。

「よく昨日休めたな」

「休みじゃなくて昨日は早出で早く帰ってきただけよ。

さて、と。もうちょい寝てくるわあ。この時間に起きてると、あとで眠くなるのよね」

眠気なんてまるでなさそうな様子で紗奈は自室へと消えた。

玄関がカラカラと開いて、閉まる音。紗奈は顔を上げた。

持ち込んだ専門書がテーブルに並べられ、昼食のあと入れた紅茶のマグカップが、端に追いやられている。

パタパタ…ッ　と軽い足音がして、リビングに可愛い顔がのぞいた。

もうそんな時間かあ、と思いつつ、帰って来た子どものほうを向く。

「おかえり〜」

明るい紗奈の声に、あれ？って感じで首をかしげたリクを、

「まこちゃんじゃなくてごめんね！。もう出かけちゃったんだ」

ケラケラと笑い飛ばす。

テーブルに着いた彼女の手元に分厚い専門書やノート、筆記用具が散らばっているのを見て、さらに目をまあるくする、リク。

「これ？ あたしのお勉強セットよ。大人になっても覚えることがたくさんあるの」

手早く片付けると、不思議そうに覗き込んでくる。

大きな横長バッグに書籍と筆記用具とをほうりこんで、立ち上がる。

「おやつ食べる？ 準備しとくから、リクちゃんは先に手洗い・うがい！」

風邪の予防は大事だからね」

返事の代わりに大きくウン、と素直にうなづく子どもに、紗奈はとびっきりの笑顔を返した。

甘いホットココアに、おやつのだーナツはリクの前。

自分用に紅茶を入れなおして。2人はテーブルに付く。

「いただきます」と、手をあわせて大きな口がそう言う。

残念ながら声はなかったが。

キョロキョロと自分の前と紗奈の前とを見比べたリクが、ドーナツをちぎってハイ。

「それはリクちゃんのよ。あたしこれからお仕事だしね」

ありがと、とその手を押し返せば、心なしかガツカリした様子で表情が曇る。

彼女の幼なじみは深夜まで帰らない。

この子はこれからの時間ずっと一人なんだよねえ。と思うと、育て親の心配ももっともなこと。

ぐりぐり、とやや乱暴に頭をなでると、目をパチクリさせている。学校のこと、家のまわりのこと、たわいないおしゃべりが続く。

授業のこと、帰り道の大きな公園のこと、練習中の自転車のこと。話しかける紗奈に、ホワイトボードにひらがなで書いて答えてくれるリク。

そうこうしている間におやつも食べ終わり、紗奈の出勤時間が来てしまった。

「玄関の鍵は閉めてくわね。ご飯はレンジの中だから、火傷しないように一個ずつ運ぶのよ」

ガラにもなく注意なんてしてみたら、素直にコクコクとうなづいてくれる。

誠が出してきた玄関のスペアキーを握って、紗奈はもう一回柔らかな髪のリクの頭をなでる。

両手を頭にやって、ふわあ、って笑う子どもの笑顔は、幸せのおすそ分けをもらった気分になさせてくれる。

紗奈はバイバイ、と手を振って、玄関を閉めた。

秋の夜は寒い。深夜ともなればより一層寒さで身が縮こまる。

静かに鍵を開け、玄関をくぐる。

厚手のジャケットを脱ぎながらリビングに入れば、ブランケットにくるまって眠るリクがいた。

昼間は日当たりのよいこの部屋も、陽が落ちれば肌寒い。11月に入ってからタイマーでエアコンを付けるようにしていた。

しかし近頃はかなり寒く、風邪をひきかねない。どのみち風呂がまだだ。

誠が名を呼べば、眠たそうに目をこすって起きてくる。

「こら、ちゃんと布団で寝ないと風邪ひくだろ」

ちよつと怖い声で注意してみたものの、布団で寝ていれば風呂で起こす時にかわいそうと思うのだから大人は勝手である。

シュン、とうなだれる子どもの後頭部のつむじを見下ろして苦笑する。

「留守番ありがとな」と声をかけると、ぱああつと輝くような笑顔で「オ・カ・エ・リ」と大きく口が動いた。

毎晩、この笑顔に癒されに帰るようなもの。

——仕事で小中学生の子ども達を相手にする時とはまた別の、言うなれば親の贔屓みたいな感じだろうか。

上着を着せてからエアコンの温度をあげる。

まわりつく子どもと一緒に風呂に入り、寝付くまで同じ布団で側にいてやる。

ホワイトボードを通じて色々と話す。授業で覚えてくる漢字やことばが話題に上がることも多い。

つたない文字と、声との会話はふたりの楽しいひと時で。

これが、春から続くふたりの日常だった。

声をなくした子どもと過ごす日々は、静かであるが存外心地よい。普通であれば、母親に置き去りにされた他人の子どもを手元に留める理由など、ない。

それを、施設に預ける気になれず、手元に留めているのは誠の我がまま。

当の本人が寂しい環境に文句も言わず、慕ってくれるからこそ続いたとも言えた。

自分こそ寂しがりやの自覚のある誠がどうしてもリクを手放せない理由はすなわち——さらに静かな一人暮らしの寂しい生活に戻れないから……かもしれない。

身勝手でごめん。

つぶやく誠の声が、子どもの寝顔に落ちた。

< 3日目 >

たっだいまい！ と帰ってみれば、どんより寝不足顔の幼なじみ

がリビングのテーブルに色々と広げて途方にくれる後姿に出会った。時計は午前10時を回ろうとしている。

「やだ、寝てないの？」

「ちよつと仕事してて……」

言いにくそうにしてるって事は、寝不足の頭がどれだけ働いてないかを自覚してるということだ。

幼なじみの経験ゆえ、言動からそう結論付ける。

家に持ち帰ってまで仕事してるのはよくない傾向だなあ、とか思いつつ。紗奈はふーん、の相槌ひとつで切り上げる。

なにせこちらまで夜勤明け。眠いし疲れているしで、やっぱり頭は働いてない。

お互い半睡状態の頭で何かを議論しても、まともな内容にならないだろう。徒労で終わる事はしない、彼女の主義だ。とりあえず忠告で済ませることにする。

「今日も仕事でしょ？ 仮眠くらいした方がいいわよ」

「期限があつてさ。あんまり時間がないんだ」

目の前に散乱するプリントアウトした英語文。几帳面な細かな書き込みは幼なじみの字で。

本業の塾講師なら教材にも使わなさそうな難解な内容を、ちらりと斜め見る。

「仕事」は副業の英字の翻訳のほうか、と当たりをつけた。

趣味とも呼べるが、誠は得意の語学を活かし、たまに翻訳の仕事をこなす。

どちらかと言えば絵本や児童書の分野で活かしたい様だが、経済雑誌の出版業界に就職した元学友に頼まれ、急ぎの翻訳を引き受けることもあった。

ジャンル違いの翻訳なため、語学力はあっても勝手が違う。

「……ほんつと、お人よしね」

呆れるくらいに他人に優しい彼は、どうしても！と頼まれれば断れない。

そのお人よしさに付け込んでる身なので、ちょっとだけ妥協する。
「仕方ないから、今日の夕ご飯作ってあげるわ」

だから寝てきなさい、と追い立てると、「すまん」とため息まじりに謝られた。

素直に片付け始めるその背に向かって紗奈は言う。

「あたしも寝るから、ぜったい目覚ましかけて寝てね」

彼女は一度眠ると中々起きないタイプである。

商店街をブラブラして、夕ごはんの材料を物色する。

冷蔵庫はお野菜がちょこつとで後は空っぽ。残っている食材で適当に、で献立を決めるほどの料理の腕前は、残念ながら紗奈にはない。

気晴らしには良いか、と、帰ってきたリクを誘っての午後のお出かけとなった。

目の前のお肉屋さん。乾物屋さんをはさんでお魚さんがご近所。

悩みの種は今晚のメインディッシュ。

「ねえ、お肉とお魚だったらどっちが好き？」

『おにく』

緑の紐で首から下げた小さなホワイトボードにマジックが走る。

お肉屋さんのコロツケに目を奪われつつ、八百屋さんの威勢のよい呼び込みに振り返るリク。真似して店先に並んだプラスチックの小さなカゴの中を見つつ、紗奈は思わずつぶやく。

「あたしピーマン苦手なのよね」

『いつしょ！』今度は口で伝えつつ、黒板に向かって手をあげる
みたいリクの手があがる。

「あら好き嫌いはダメよお。」

体に良いものは食べないとね。え？ピーマン……、あたし

は食べれるもの」

フッ、と威張って胸を張ると、クスクスと声なく笑う子ども。

「笑ったなあ？」

一緒になって笑いながら歩き回ると、アッという間に商店街を通り過ぎてしまう。

途中で誘惑に負けた熱々のコロツケと、大きなリンゴをふたつ購入していた。

さすがにコレだけでは食卓が寂しい。戻って野菜とお豆腐屋さんの厚揚げとを買い足し、合わせて煮物を作ろうという事になる。

惣菜屋さんの前で、「ほうれん草の白和え」と「ベーコンとポテトの炒め物」のどちらにするかでふたりは迷う。結局コレ、とリクが指さしたのは「肉じゃが」だった。

3人分詰めたパックを、こぼさないように慎重な手つきでリクが受け取る。

キッチンにかけてあったエコバッグに入れてしまえば、お買い物は終わり。

「散歩して帰ろうか」昨日言ってた公園に行こうよ」

目の前に手を差し出せば、パチパチっと目を瞬かせる子どもが指先を、その先の顔を確かめるように見上げる。

笑顔と、誘うように何度もグッパ―させた手にようやく笑って、リクは手を重ねた。

線路沿いの銀杏並木。

金色の落ち葉がフェンスの足元にたくさん吹き寄せている。

ざああああ、っと強い風が吹けば、風にあわせて落ち葉が扇状に舞った。

手をつないだまま、ふたりは先を争うように金色の落ち葉を追いかける。

始めたのは紗奈で、その楽しそうな様子に釣られたリクも足元の葉っぱを踏んでいく。

木から落ちたばかりの綺麗な落ち葉を踏んでたどるうち、道の落ち葉の種類が増えていた。

オレンジ。

明るい茶色。

こげ茶の葉。

踏むと紅茶のような香りの葉っぱもある。

夕陽で落ち葉の色が陰る中、目的だった大きな公園まで来ていた。夢中になって気づかなかったとふたりして顔を見合わせて笑う。濃淡で複雑に彩られたフチがギザギザの落ち葉を、ちいさな手が宝物のように拾い上げる。

見て、と振り返れば、

「綺麗ねえ。汚れてないし、持って帰ってしおりにする?」

後ろからのぞきこむ紗奈のやわらかな口調に、リクははにかんで頷いた。

夕陽のまぶしさに見えないけれどその顔は優しく笑っている。それが心にくすぐったくて。

< 4日目 >

学校からの帰り道。

朝・・・・・出かけに紗奈が言った「今日は一日お休みな」の言葉がリクの足を軽やかにさせる。

昨日読んでもらった児童書の、葉っぱのしおりのその続きを読む

でもらうこと。

おやつにクッキーを一緒につくること。

家には、紗奈と交わした「ふたりの約束」が待っている。

いつも誠が帰ってくるまで一人ぼっちの放課後。その放課後が待ち遠しくて楽しみだなんて、これまでになかったこと。

特に給食を食べておしまい、の水曜日は。

待つ人のいない家に帰りたくなって、普段はぐずぐずと誰よりも遅く学校に残っている水曜日。今日は真っ先にランドセルを背負ったから、担任の先生も驚いていた。

不思議とその時の顔は、朝ごはんの席で紗奈と目くばせしあっていたら、いじけた誠と重なる。

どちらの顔も、思い出したら愉快的気持ちになりクスクス笑う。

浮き浮きしながら帰ると、さらに嬉しいことに誠の自転車が玄関先にあった。

自転車通勤なので、こんな時は、お仕事がお休みの合図。

いつもは朝ごはんの時か、いつてらっしゃいと見送ってくれる時に言ってくれる。おしゃべりな紗奈もいる3人の食卓はとてもにぎやかで、伝え忘れたようだ。

ただいま！ と、声は出ないけど大きな口で挨拶して、家の中に駆け込む。

靴を放り出すように脱ぎ捨て、冬用の緑のパーカーを廊下のハンガーにかける。

その真下に、大きな紙袋がいくつか置いてあった。

まるで紗奈が来た日、あとから誠とふたり持ち帰った荷物に似ていた。

荷物なんてとつくに部屋に運ばれていたはず。少なくとも今朝はなかったから。

——ほんの少し、リクの胸の奥に小さな不安を生む。

戸惑いながらリビングに入ると、明るい紗奈の「おかえり」じゃなくて、なぜかとても疲れた顔の誠が出迎えてくれた。

「もうそんな時間か。お帰り」

いつも穏やかな誠らしい、いつも通りの穏やかな声。

ちよつと安心して、椅子の背中越しにペタってひつつく。セータからは不思議とほこりっぽいにおいがした。

「リクちゃん、おかえりー」

廊下ごしに聞こえた明るい声は紗奈。

ほどなく、携帯電話を片手にリビングに入ってくる。振り向けば、笑顔で応えてくれる。けれど気持ちは携帯電話の向こう側にあるようだ。

「……そうそう、工事がいちおう終わったみたいだから見に行ったんだけど。片付けるのが大変で……」

もれ聞こえる言葉に、リクはびっくりした。

そわそわと紗奈を見、誠を見る。

眠たそうにしている誠は何も言わない。その背中をポカポカ殴っておいて、紗奈を追った。

気になって、まとわりつく。不安。そう不安。

うろろと周りを回れば、静かにね、と唇に人さし指をあててたしなめられた。

シュン、と、うなだれると、その頭を優しくなでられる。

嬉しいけれど、その先の言葉が気になって仕方ない。

「——え？ いや、うん。大家さんにも挨拶したからさ」
けれどもリクを見たのは一瞬だけで、また携帯電話に戻ってしまった。

そっけなさに、ますます不安が大きくなる。

ドキドキしながら待っていると、ようやく紗奈が携帯電話を手放す。

「ビッグニュースよりクちゃん！」

につこりよりもにんまり笑顔なその向こうで、これまた渋い顔の誠がため息をついている。

「寮の工事が終わったから、ちょっと見に行ったのよね」

さつきも電話に向かって話していたそのままの言葉。弾むような紗奈の声。

先を聞きたなくなつて、リクはキュツと両手を握る。

（帰っちゃうんだ）

そう心の中でつぶやけば、紗奈の声が聞こえないくらい小さくなつていく。

不安は今や大きく大きく育ち、「ちょっとリクちゃん 聞いてるー??」なんて呼びかける紗奈の口パクと、目の前でヒラヒラさせてくる手のひらが、思い出と同じでリクをおびえさせた。

—— ママの手と一緒に。最後に見えたのはバイバイ、と振った手のひらで。

それは別れの合図だ。

思い出して、ほろほろとこぼれる涙が幼い頬を零れ落ちていく。

「.....うそつきい.....」

リクは、しゃくりあげるように小さな声を残して、紗奈の真横を走り抜けた。

これ以上は聞きたくなかったから。

「—— あたし何かしたっけ？」

びっくり。と、顔に書いた紗奈の驚いた声と。

ガラガラッ、ガシャン、と悲鳴みたいに引き戸の玄関が開いて、閉まった音を聞いてから。

「さー。というか……、あいつ　今しゃべってなかったか？」

こちらは啞然、とした表情の誠。

しばらく呆然としていたふたりが、リクのパーカーを持って探しに出るのはもう少し後のこと。

寒そうな強い風が吹いてからだ。

泣きながら歩いた道は、どこをどう通ったのか。顔をあげれば、そこは商店街の中。

夕方より少し早いから、まだ人影はまばら。お店の人こそいるが、小さなリクがひとりで歩いているから怪訝そうに見ている。

居心地の悪さに、リクは首をすくめて商店街を抜ける。

てくてく歩いた先に、今度は線路添いの銀杏並木が見えた。

金色の落ち葉が、昨日と同じでたくさん積もっている。

あんなに綺麗に見えた昨日と違い、くすんで見えた。

ものすごくガッカリした気分で、目についた角を曲がる。今度は見慣れた公園へ向かう道。

かげつてきた空の色がますます道を暗くさせる。

たくさん落ち葉。蹴散らして走るけど、ちっとも楽しくなかった。

大きな公園の、遊具があるのは反対側。今日みたいに寒い風の日には子どもだって外に出たがらないから、ただでさえ静かな公園のこちら側はいつそう寂しかった。

風が落ち葉を巻き上げる。見とれていたら、くしゃみが出た。

でも、帰りたくない。

帰りたくない、なんて思うのは初めてで、リクは自分にびっくりする。

どうしよう……。

途方にくれて、しゃがみこんだ。

足がしびれ始めた頃。

「リク」、と呼ばれて顔をあげれば、後ろに誠がいた。

「探したぞ」

優しい穏やかな声は、リクの大好きな声だ。

おいで、と広げる両手に、泣きべその顔で抱きつけば、ギュって抱き返してくれる。

「こんなに冷えて……。外に行くならちゃんと上着を着て行きなさい」

小言さえも穏やかで優しく、心の中が暖かくなる。

だからリクは、誠のことが好き。

寒いだろうと誠は自分のジャケットを着せてくれた。

ジャケットごとリクを抱きあげると、ズボンの後ろのポケットから携帯電話を取り出す。

「見つけたよ。そっちはどこにいる？ ああ、それなら家に帰ったほうが近いな。うん。すぐ戻る」

誠の顔をはさんで反対側のリクにも聞こえた、紗奈の声。

すぐに電話を切って、帰ろうか、の誠の言葉に、いやいやと首を振る。

——帰ったら今度こそ紗奈とさようならをしなきゃいけない……。

いやいやの理由を察したように、クスツと誠が笑った。

「お前、紗奈の話ちゃんと聞いてなかっただろ？」

笑い声で、リクを抱く腕が揺れた。

「紗奈、しばらくウチで住むんだってさ」

え、っと驚くリクの耳には、

「……………住んでた寮が古くてボロすぎて、水道管の修理をしたら建物の土台から腐っていて、住めるどころじゃなかったんだ、って誠の説明は聞こえなかった。」

それくらいビックリして、ぽかーーーーんってしてたから。

（後書き）

ちよつとした「毎日」の出来事の愛おしさ。
なんてことのない光景を、ふと思い出すとても暖かい気持ちにな
る。

そんなものが表現できてたらいいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2149y/>

落ち葉の道、並んで歩くと

2011年11月4日19時03分発行